

広州日本人学校における進路指導と実践

前広州日本人学校 教諭

大阪府大阪市立鯉江中学校 主務教諭 丸谷 浩久

キーワード：在外教育施設、広州、進路指導、海外学校説明会・相談会、日本以外の進路先

1. はじめに

平成27年度より3年間、広州日本人学校に赴任し、小学部・中学部で理科の授業を担当させて頂いた。私は中学校所属ではあるが小学校の免許も所有しており、はじめて、小学生に理科を教えるという貴重な体験をさせて頂いた。現在では、日本でも小中一貫校が増えているが、在外教育施設では以前から当たり前のことである。

また、大阪の中学校では生活指導畑であった私が、赴任当初から進路指導主事として児童生徒の進路指導に携わることとなった。前進路主事と入れ替わりの赴任となったために、初年度は資料を参考にしたり中学部の教員に聞いたりしながら、児童生徒にとって最も良い進路選択になるように指導に当たった。

これから赴任される中学校の先生方の参考になればと思い、生徒の進路指導に的を絞って述べてみたいと思う。

2. 広州日本人学校の進路の概要

広州日本人学校の児童生徒数は約400人で、そのうち生徒数は約80人である。広州日本人学校には高等部がない。学年によって異なるが、中3の人数は15人から30人ほどとなる。高学年になって行くにつれ、生徒数が減少していく傾向にある。保護者の長期赴任が決定している場合、途中でアメリカンスクールやその他のGrade10（日本における高校1年生）以上の生徒が在学できる在外教育施設に編入していくケースが多い。広州は日本の自動車産業を引っ張るビッグ3が揃って工場を構える唯一の都市であり、進路先も愛知県、栃木県、神奈川、東京が半数以上を占める。

3. 生徒の進路

(1) 生徒たちの受験校・進路先

ほとんどの生徒たちは卒業と同時に母親と日本に戻り、父親は中国での単身赴任という形を取る。一般的には日本と同じように、私立高校を専願で第一志望とするか、国公立高校を第一志望とし私立高校を第二志望として日本に戻り受験する。

両親ともに広州に残る場合には、在広州のインターナショナルスクールに進学するケースと海外にある全寮制の日本の高校に進学するケースがある。インターナショナルスクールの中には国際バカロレアを取得できないケースもあり、その場合、大学受験できないことから、NHK学園などの通信教育で高等学校卒業資格を取得して対応している。

また、インターナショナルスクールは9月始まりであることから、中3の夏休みで広州日本人学校を去る場合や、広州日本人学校を卒業してからインターナショナルスクールに編入学するケースなどがある。

(2) 進路学習の取り組み

広州日本人学校の進路学習として以下の取り組みがある。

① 3年

4月：保護者懇談会・第1回実力テスト

5月：個人懇談・保護者進路説明会・海外子女教育振興財団による中高校説明会

6月：進路希望調査・三者面談

- 7月：職場体験学習・三者面談・早稲田支部やシンガポール校の学校説明会
- 8月：夏休みを利用して各自帰国して高校見学体験入学・第2回実力テスト
- 9月：進路希望調査・実力テスト
- 10月：各自の受験予定校一覧提出・実力テスト
- 11月：三者懇談
- 12～2月：出願書類作成・出願・受験
- 3月：入学手続き・3年生と語る会（中1・2、小6）

② 1・2年

中学部卒業後の進路調べ・自分の進路を考える・進路計画を立てる・身近な職業を調べる・職業の三要素について・将来の夢・3年生と語る会・夏休みに高校見学

4. 広州日本人学校における進路指導

(1) 進路選択（志願校決定）

中学1年生の頃から進路に対する意識は高く、学校からの情報に加え、兄弟やマンションの先輩、保護者の勤務先からの情報も参考にし、目標とする学校を既に決めていることが多い。最終的には、帰国して志望校を訪れ見学し説明会に参加して決定するように指導している。広州日本人学校で行っている実力テストは日本全国をカバーする業者テストを取り入れているが、その他に、埼玉では北辰テスト、愛知では全県模試、関西では五ツ木の模試などを各自で受けており、学校の実力テストに加えて進路面談の時に結果を持参してもらい参考にしている。各模試は広州の自宅まで郵送してもらっているケースが多く、わざわざ日本に帰る必要が無い。帰国のタイミングが合えば、入試の練習のために日本で模試を受けるようである。

(2) 志願校決定から出願へ

進路主事が帰国して全ての高等学校に赴くわけにも行かず、保護者の帰国に合わせて各志願校や教育委員会の担当者と会って説明を聞いてきてもらい、その内容と担当者の連絡先を伝えてもらっている。進路主事が必要に応じてその担当者と電話やメールで連絡を取りながら出願書類を作成している。出願に際しては郵送の時もあれば保護者が日本に帰国し出願するときもある。

5. 在外施設における進路指導の課題

日本全国が受験先となるため情報収集が欠かせないが、中国では閲覧できないHPが存在した。また、急な進路変更があった場合、海外のため間に合わせるのに苦労した。